つながる図書館プロジェクト～本を通じた「つながり」作り～

団体名●つながる図書館プロジェクト／代表者名●田嶋卓也（経済学部経済学科３年）

はじめに

当団体は、図書館の利用者学生が主体的に企画・運営することで図書館の利用者増につなげるとともに、社会に役立つ人間性を身に着けたいという思いから結成された。

本学の図書館では、「知る・深める・つながる」のキャッチフレーズを掲げている。当団体は、その中の「つながる」をテーマに、本を通して人と人とのコミュニケーションの場を提供することを目的として活動をしてきた。

活動内容

①図書館の背表紙　毎月発行

毎月学内メールの Seiryo weekly に当団体が実施しているイベントやコーナーの情報、短い書評などを載せ、より広い企画の周知を行った。

②やってみた企画　9/28 ～ 10/31

今年度の新企画として実施。図書館内の「How to」本を実際に体験したものをポスターとして図書館に掲示した。

③おすすめ本のポップ紹介　11月

当団体のメンバーがおすすめする本のポップを自作し、本と共に紹介した。

④流星祭　10/31 ～ 11/1

例年とは違い今回は屋台出店のみとなったが予想以上に売り上げを伸ばすことが出来、より多くの寄付へとつなげることが出来た。

写真１　流星祭屋台

⑤クリスマス企画　12/11 ～ 12/23

クリスマスに関連する小説や絵本の展示を行った。展示した本を実際に手に取って眺める人や貸し出しをする人が多くみられた。

⑥ビブリオバトル　12月～ 1月

例年はバトラーと観客が対面し書評合戦を繰り広げていたが、今回はバトラーの発表を動画として作成、配信した後、オンラインのアンケートで投票するという形で開催した。

写真２　ビブリオバトル参加者

成果、結果の考察

2020年度の活動は新型コロナウイルスの影響で活動が厳しい状況にあったが、インターネットを利用することで今まで対面でやってきたことを非対面に落とし込み、様々なイベントを開催することが出来た。さらに非対面でイベント準備を進めていく中で一人一人に仕事を任せる機会が増え、昨年より個人の自主性も上がったように思う。また図書館や学生支援課と協力することでイベント情報をより広く周知することができ、イベントの周知が足りないという昨年挙がっていた課題も改善することが出来た。

反面、今年度から SJP がちいプロになったことによって「地域に向き合い、地域に学ぶ」が目標になり、地域に関わることが活動に求められたが、当団体の活動の性質がいわば図書委員会の延長線上に近く、その目的は大学内部の改革が主であることから、地域に直接的、または定期的に関わっていく手段を探すことが難しかった。また、団体の存続期間の長期化から「つながる」ということが当初何を指していたの

かについて考える時間をとれなかったことで目的意識が希薄なところがあり、何を目的にするのかについての議論があまり盛り上がらなかった。

総じて、例年の企画や、コロナ禍でも貸し出し数を増やすための企画、学生が図書館にいなくても本について触れることができるようにする企画を立案し、実行するという実務面に関することは十分にできていたうえに、個々人のキャパシティの拡大を図れたが、なぜ本を読ませたいのか、自分たちの何で地域に関わっていけるのかという意識面については不十分、又はできていないという結果であった。

今後の課題、展望

今年度は新企画の取入れを行ったことやコロナウイルスの影響から、従来行ってきた企画を新たな形で取り組むことの多い1年となった。その中で様々な課題が見えてきた。

まずイベントを行う上では、初めての取り組みであったことから予想以上に準備に時間がかかり日程が遅れることが課題となった。これについては、予め準備期間に余裕をもたせることで、直前に準備を詰め込むことがないよう改善できる。また、日程の遅れる原因として学生や教職員の忙しい時期に企画を行ってしまい、企画に巻き込めなかったことがある。この点は企画の段階でその時期の学生、教職員の動きを把握できれば解決できる。

また、イベントの参加者が去年に比べて少ない点がある。コロナ禍の影響でオンライン授業が増えた結果、自宅にいる学生が増えたことで学校内のポスターによるイベントの宣伝の効果が相対的に下がったのではないかと考える。そのためイベントの周知やビブリオバトルの動画のURLを配信することも学生支援課からの学生へのメールに頼る結果となってしまった。この点に関してはメンバーからSNS利用が解決策として挙げられているが、管理運営の難しさと読んでほしい人に届かない可能性が危惧される。

次に組織内の課題としては、実際に会うことが少なかったこともあってメンバー間で情報共有があまりできなかったこと、集まる日程の都合がつかないことがあった。

情報共有については、情報のやり取り自体は多かったものの、情報が流れて行ってしまい結果的に共有できていなかったので、こまめに情報を一括にまとめる作業を行うことで改善できる。

集まる日程の都合がつかない点については、多くの学部・学年の違う生徒が集まっていることが原因と考えられるので、作業を分担する際に学部・学年を考慮して分けることである程度改善していける。

まとめ

大学の図書館に学生としてその活動に参加させていただいたことには、大変大きな意味があったと思う。図書館の目標が知識や教養、文化的な娯楽の提供であるとするならば、これを学生の目線で解釈し、微力を尽くせたことは私たちにとって大きな経験となった。それぞれが考えて、自分の本をプロデュースしたり、ほかの人が発表する舞台を整えたりしたことは、私たち個々人の将来で必ず役立つであろう。よって「つながる」をテーマとして活動した私たちつながる図書館プロジェクトの活動には大きな意義があったといえる。

また、組織として活動することについて学び、実感を得られたことも価値がある。違う学部や学年の学生が共に目的をもって活動することによって可能になること、その逆として出てくる弊害、誰かに支援してもらっていることのありがたさなどについて知り、人とのかかわりを通して自分を見つめることができたことで、様々なことを実感として取り入れることができた。

私たちは今年度で活動を終了するが、学生の教養の開発、そして育成は学部や学科を問わず、質の高い学生の育成につながるため、その現場に学生自身が飛び込み、問題に取り組んでいくことは地味ではあるが、奥が深く、そしてやりがいのある活動であるため、今後、新しい団体にも挑んでほしいと感じた。